

## え？陶芸を始めたんですって？

OWCC 中川和道 climber-nak@bca.bai.ne.jp

おれ、陶芸、始めたねん・・・。山仲間がにやにやしながら話す。1985年頃のことだ。今でもふと、思い出し笑いしてしまう。今回はこれを書こう。

陶芸を始めたと言ったのは、負けん気つよい、胆汁質を絵に描いたようなクライマー。アドレナリンのかたまりみたいなやつで、滝谷で大きなくしゃみをしたら、滝谷じゅうに響き渡ってごだまする、そんなやつだ。そいつが、いったい何で、陶芸やねん？周囲にたずね回った。すると、「あいつは7000m峰を登ってきたんだ」との情報。そうか、さては頂上の石を焼き込んだぐい呑みを作るつもりらしい。「植村直己の記念館だかに、エベレスト頂上の石を焼き込んだぐい呑みが展示してあるよね」と水を向けた。意外なことに彼は、ちょっとはにかみ顔で、「うん、俺もやってみようと思って・・・」とのたまうではないか。人間の多彩な側面とはこういうことなのだろうか、と当時は思った。思い出し笑いした。

後日談もまた面白い。アズキ豆ほどの石がうまく焼き込めたことに味をしめた彼は、いろいろな小石を試したという。その結果、うまくなじむ石と、なじまずポロツととれてしまう石がある、とのことだった。おそらくはその石の熱膨張率が陶器のそれと合わないのだろう。それにしても、頂上の石を盃の底に眺めながらの一杯、ええなあ、うらやましいものだ。

そう、昔は、石ころを拾ってもおとがめはなかった。今はだめだ。新宿駅前にザックを置いて飲屋に行ったクライマーがザックを持ち去られたのに気づき、盗難届を出したという。「何か大事なものは入っていましたか？」と問われ、「南極(だったかな)の石。命より大事です」と答えたら、「それは持ち帰り禁止。罰の対象です。」と、今度は調書をとられたとか、何かで読んだ。そう、今は法律で保護されているのだ。ある仲間は、昔、6500mのC2付近の石灰岩表面にウミユリの化石がボジに浮き出ているのを持ち帰ったらしい。よき時代の物語。今は昔、である。

そう言えば、中学高校の理科実験教材を開発する自主サークルの仲間も、ある時、陶芸を始めた。ご多聞にもれず、やんやの質問攻め。「うん、教訓さかずきを作ろうと思って」、やっぱりそんなものだ、純粋な陶芸に目覚めるはずがない。教訓さかずきとは、8割くらいまでお酒をついで、それ以上欲張ると、全てのお酒が底に空いた穴から流失する、「欲張らずほどほどに」という教訓を教える盃である。サイフォンの原理の応用で、ピタゴラスのカップとか十分盃とかいろいろあるらしい。陶芸の素人がサークル例会にまず持参した作品は、何と、どでかい「教訓どんぶり」。「小さいのはまだ作れなくて・・・」。半年後には盃に到達したから大したものだった。

この体験から中川が得た教訓、それは、クライマーや教材研究屋が陶芸を始めたら、それは純粋でない場合が多い、ということだ。中川は陶芸はやらなかったが、自分も含め、教訓は共通だ。